琉球文化財研究室

幸喜 淳[1]

キーワード：首里城　首里城公園　公園維持管理　調査研究

１．はじめに

琉球文化財研究室は、首里城に関する資料収集、調査研究、技術開発及び普及啓発を行うとともに、首里城公園管理部が維持管理を行う首里城公園の利用促進につながる活動を推進する。

主な事業としては、調査研究業務と受託業務、普及啓発業務を実施している。地域貢献として大学への講師派遣を行い、首里城の歴史文化を普及啓発した。

令和元年 10 月 31 日未明、首里城は火災によって正殿をはじめ、南殿･番所、書院･鎖之間、黄金御殿、寄満、北殿等の建造物の他、美術工芸品の一部が焼失した。それらの被災美術工芸品の修理を令和 3 年度より本格的に開始し、令和 4 年度は、絵画・漆器・陶器の修理を行った。

２．実施体制

琉球文化財研究室の体制は正職員 4 名、フルタイム専門職員 2 名、伝承者育成事業担当として補助職員が 1 名であった。

３．実施内容

１）琉球食文化に関する調査研究

琉球料理 「美榮」の料理について記録調査は実施できなかったが、美榮スタッフから提供の料理記録画像データを保存収集した。また、雑誌や取材のための原稿校正や修学旅行生からの質問への回答作成を行った。その他、食文化関連の講座等へ参加し、情報や資料収集を行った。

２）首里城関連施設における室内空間の史料調査

焼失した南殿、書院鎖之間の床の間飾等について、再建時における空間を再現する検討を行うため、王国時代の資料や先行研究等を収集した。

３）修繕事業

・収蔵品修繕事業

財団所蔵絵画資料のうち、毛長禧の「闘鶏図（闘鶏花房之図）」の修理を行った。解体修理を行い、従来表装裂にて隠れていた部分についても見えるように裂の調整を実施した。その他、蛍光 X 線調査や紙の分析などの科学調査を実施した。

首里城火災により被災した漆器の修繕では、本格的に修繕を開始し､漆器 12 点の修理が完了した。また陶器では、7 点の修理が完了した。

加えて、修繕作業が長期に渡るため、沖縄県内にて修理技術者の人材育成を開始した。

・琉球・沖縄の染織資料調査　業務

王府の正装である黒朝衣の復元製作のため、芭蕉糸について調査を継続実施した。

財団所蔵染織資料の分析結果整理し、特に色材調査の結果を報告書としてまとめるため、原稿作成を行った。

また、南風原町の大城機製作所より文化庁補助による調査報告書作成を受託し、沖縄の高機製作の映像記録の作成など、多くの調査データを収集することができた。

・漆塗装検討業務

琉球王国時代の漆器製作のため､被災した漆器 3 点について、蛍光 X 線調査を実施し水銀朱の使用方法など漆器製作工程の検討を行った。

琉球産弁柄について、名護市久志集落にて製造試験を開始した。顔料の安定性確保のため、微粒子化などの試験を実施した。また、製造 BIOX 弁柄、自然採取BIOX弁柄を基に複数の試作手板を作成し、耐候性試験を実施した。今後は久志区へ本格製造設備を準備し、試験を実施する予定である。

・祭祀等に関する調査

首里の旧士族家に戦前、所蔵されていた扁額について、文献調査やヒアリングを行った。

琉球楽器については、研究顧問が実施の琉球楽器音階調査に協力し、併せてヒアリングを行った。

また復元楽器を用いた演奏に向けて、県内における御座楽楽器の演奏を継承している個人および団体に聞き取り調査を行った。調査したのは、西原町で継承されている哨吶音楽の保存団体、県内で活動する御座楽演奏団体、哨吶奏者、二胡奏者の 4 者で、うち 3 者で演奏記録を実施した。演奏する

[1] 琉球文化財研究室

際の楽曲や奏法の検討材料とし、今後も関連楽曲や奏者の調査を行う。

楽器聞き取り調査の様子

４）受託研究

沖縄県立博物館・美術館が発注の琉球王国文化遺産集積・再興事業基本設計業務に㈱国建と共同企業体を組み受注した。基本設計では各分野の候補資料について、基礎調査を実施し、業務報告書を作成した。

また首里城復興基金を活用した瓔珞に関する復元製作業務を受託し、刺繍・緞子製作について、検討を開始した。

これらの受託業務の成果から、将来、首里城公園の展示に資する復元製作研究の実施も期待される。

５）伝承者養成事業

過年度からの継続で、文化庁からの助成による、琉球建造物漆塗及び琉球赤瓦製造について、技術者養成事業を行った。塗装分野で 4 名、瓦製造分野にて 5 名、瓦葺き分野にて 5 名の研修生を受け入れ、各分野での実習を行った。今回初めて、県外での実習現場視察を行い、当分野では日光へ、瓦製造、瓦葺き分野では、奈良へ視察を行った。関連する各分野の専門家を招いた座学及び実習を実施した。

６）普及啓発事業

・首里城収蔵品報告展

首里城の火災から 4 年を経過し、様々な被害調査の結果や修理が終了した美術工芸品について、首里城公園内にてパネル展を実施した。財団のこれまでの調査研究・復元事業や人材育成事業についても併せて展示を実施した。

４．外部評価委員会

当室の事業概要報告及び17件の課題管理シートに基づき評価を踏まえて、研究顧問より多くの意見をいただいた。

委員：高良　倉吉（座長・琉球大学名誉教授）
　　西大八重子（生活文化研究所西大学院院長）
　　安次富順子（安次富順子食文化研究所所長）
　　喜名　盛昭（中国民族音楽研究家）
　　宮里　正子（元浦添市美術館館長）

評価すべき点として、

・「漆塗装関連調査」：正殿の再建を左右するものであり、大いに評価したい。
・琉球建築の色材に関する実験的かつ実用化にむけた調査事業は、高く評価。今後も外部研究機関との連携、共同研究の体制を進め歴史文化の継承や産業化を期待する。
・「琉球染織資料の調査研究」：王国の官服研究には、重要かつ必要な調査である。繊維形状や織密度と併せて構成（縫製・針目など）のデータも収集し黒朝の復元に繋がることを期待する。
・「琉球楽器催事検討業務」：復元楽器の調弦、調整の結果、殆どの楽器が演奏可能である。
・「収蔵品修繕業務」：「闘鶏図」①～③が、修理に伴い、科学調査も実施したことは高く評価する。また、国内最大規模の「保存修復学会」での発表は重要で琉球絵画研究への貢献となる。
・「県博別途受託琉球王国文化遺産集積・再興事業」：琉球の美術工芸研究の礎となるべく事業である。製作技術や科学調査などによる情報の蓄積は重要で、研究の進展に大いに貢献する事業である。
・「漆塗・琉球赤瓦製作施工文化財保存技術（伝承）事業」：無形文化財である伝統技術の継承は、実作者の育成が重要である。今後も他機関との協力体制を継続し、技術の蓄積や産業化につながることを期待する。

見直すべき点としては、

・「在外首里城関連文化財調査」：展示を充実させるためには、復元製作は不可欠である。そのためには、在外文化財の確認事業は重要かつ必要な事業で今後も継続する必要がある。コロナ禍や諸事情など困難な面もあるが、内部で過去の展覧会・報告書などから作品の所在データ集積を提案する。
・「琉球食文化の調査研究」：予算の執行率が６６．３％と低いのはコロナ禍の影響か。王国時代の料理再現に向けた自主事業の進行状況が見えない。次年度に期待する。
・琉球料理美榮で研究会が開催されなかったのは、残念。今後、食文化について研究会が開催されるとよい。
・料理を供した器（漆器、中国・日本磁器、壷屋焼など）についても引き続き調査を期待する。
・「琉球楽器催事検討業務」：揚琴（瑶琴。夜雨琴）は十分に使える楽器であるが、金具の絃巻土台が強固でなく、調弦に不具合が出るので修繕が必要である。

５．今後の課題

琉球文化財研究室における調査研究事業は、公園機能の向上、文化環境の保全・継承、首里・沖縄地域の文化・産業振興、財団の発展の４つの目的が挙げられる。首里城公園では、令和元年の首里城火災、その後の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、公園の入場者数は激減している。しかしコ

ロナウイルスの状況も落ち着き始め、年度末からは、入場者数も少しずつ持ち直してきている状況である。

この状況を鑑み、首里城公園機能の向上、財団の発展に関する調査研究が最優先の課題となり、これを考慮に入れた事業の推進が求められる。

また、首里城の復元事業が、国・県によって進められており、それにかかわる事業も遅滞なく進める必要がある。

具体的には正殿等建築物の漆塗装に関する琉球産弁柄の開発、扁額等の古文書調査、室内空間の資料調査などである。

また、火災による被災美術工芸品については、修繕計画の提言が出され、これに基づいた適切な実施が今後の重要な課題となる。また、委員会からは修繕業務に携わる人材の育成も提言されており、令和 5 年度から事業に財団として着手し、本事業の円滑な推進とともに、首里・沖縄地域の文化の保全・継承、産業振興などにも貢献していく。

また、令和 4 年度は沖縄県立博物館・美術館ら復元製作業務が新たに事業化され、これまでの当財団の復元製作のノウハウを生かした事業展開を試みていく。